

(注三) 生年の不明な作者が多いので、本稿では世代で作者の層を分けてみた。しかし、系譜上の世代差と生年の差に等比関係がないことも少なくないので、今後、更に生年の調査を続けたい。

(注四) 1011番歌は、玉里文庫本では兼利女の作とするが、垂城史談会本では兼利妹となっている。

(注五) 拙稿「松操和歌集」の新納忠元、忠増、久品の和歌——その原形から所収形まで——(『研究年報』第二十八号、平成一〇年三月)。

(注六) 「資料翻刻『あつまのゆめ』」(『研究年報』第三号、昭和五〇年三月)。

(注七) 『研究年報』第十五号(昭和六二年三月) 所収の福井迪子元教授の翻刻「南九州の国文学関係資料(十七) 垂水の文学(一)『浪の下草』」に依った。

最後に、貴重な資料の利用を許可していただいた東京大学資料編纂所、鹿児島大学附属図書館、ならびに本学附属図書館に厚くお礼を申し上げます。

本稿は、平成十二年度科学研究費、基礎研究(A)(2)「近世薩摩における大名文化の総合的研究」による成果の一部である。

(平成十三年五月七日受理)

又、編者川畑篤実が集めた材料にどのような姿勢を取っているか、といったことを調べてみた。

本稿において、『松操和歌集』の材料として更に『法皇御點二十首和歌』『吾妻の夢』『浪の下草』を追加した。「羈旅歌」に紀行から数首を採用するということは、『新納忠元日記』等で認められていたが、既に指摘されていた通り『吾妻の夢』ではもっと数多く行われていた（最多と見られる）。紀行歌の他の部への転用も、『大島久左衛門忠泰高麗道記』の和歌が「雑歌」に入れられている例があったが、『吾妻の夢』でも「釈教歌」にいれる和歌があった。

添削の施されている和歌の扱いは、先に記したように細川幽斎、中馬諸香、寺山用央の添削は大方受け容れられていたが、後水尾法皇の添削は大方が無視されていた。この対応の違いの理由は詳らかにし得ていない。

本田親孚が編者した『稱名墓志』は、新納忠元・忠増父子の所収歌については近さを感じさせたのであったが、『稱名墓志』を最後に仕上げた伊地知季安の『稱名墓志備考』とは大幅に異なっていた。伊地知季安は著名な歴史学者であったが、この違いは何によるのであろうか。「西海拾玉」と作者が異なってしまったという訳だが、これは川畑篤実が「西海拾玉」を知らなかったか、余り重視しなかったということだろう。勿論、『松操和歌集』によって新たな「西海拾玉」を編成したとも言える訳で、対抗意識があったとしてもおかしくはない。『松操和歌集』の序が先行の薩摩歌集に触れず、「元龜・天正より此方」の初めての薩摩歌集であるかのような

書き振りでるのは、『西海拾玉』が私的な選集であり、『松操和歌集』が島津斉宣歌壇に支えられていたことによるのかも知れない。「西海拾玉」は、島津斉宣の父重豪の文化政策に触発されて、本田親孚・伊地知季安の周辺で編まれたのもあったらうか。

前稿でも記したことであるが、川畑篤実は、序文で「いはけなきより和歌を好み道にこゝろさすといへとも、もとより材質の庸下にて、よしあしも分ぬ難波女のすなとりするたくひ、三の浜松いたつらにとしをかさねたるはかり也」と卑下しているが、このように調べて来てみると、彼が決して材料に依りかかっていたのではないことが明白になった。川畑篤実は、各部の内容を充実させる為に、材料に手を加えて、歌の足りない部の和歌に仕立てたり、和歌にも相当に添削の手を加えている。このような姿から見れば、川畑篤実が島津斉宣歌壇の指導者的存在だったのではなからうか。そして、この川畑篤実の盟友の一人が末川周山だったかと思われる。更に、これらの選集を支援した堂上歌人がいた筈である。川畑篤実は誰に就いていたのであったらうか。

（注一）昭和五十五年三月発行。解説は、田中道雄氏が主に執筆されたが、和歌に関する部分は福井迪子女史の手になったかと記憶する。本稿の『松操和歌集』の引用、歌番号は、全てこの叢書本に依っている。

（注二）作者の後ろに（ ）で記したのは所収歌数である。猶、諸本で歌数に違いが出る場合は、一、二首のように記した。

秋の比父の墓に参りて<sup>まか</sup>

1085 消はてし野への煙の跡とへはこたへぬ露にあき風そふく

子にをくれける比明暮墓に参りて<sup>まか</sup>

1086 草の原とふも悲しき道芝の露に袂のぬれぬ日はなし

島津美作貴澄室

なくもなひく

1329 しつかなる風を心に春の日のなくもなかひく青柳のいと

島津大炊貴柄室

286 とふはたる数もかくれす行水にうきてなかる、かけの涼しさ

初雪を<sup>x</sup>

613 ふり初てあとおしまる、庭の面は人もまたれぬ今朝の白雪

右の垂水郷女性作者の和歌は、末川周山室のものを除いて、全て文化九（一八二二）年正月に末川周山によって編まれた垂水郷の第一選歌集『浪の下草』<sup>（注七）</sup>によっている。

伊集院兼貞妻の815番の和歌の題は、『浪の下草』では垂城史談会本のよ  
うに「を」が無い。1085番の詞書は、「父の身まかりて後、はか所にまうて、」  
と『浪の下草』にある。和歌も上の句は「玉の緒の絶にし野へを尋れは」  
とあり、川畑篤実によって大幅に改められている。『浪の下草』では「野  
へ」で絶命したように見えるのを、火葬の地に改めた訳で、こちらが自然  
だろうと思われる。1086番の詞書も『浪の下草』には「いときなき子にをく

れて、日くはか所にまうてける時、心の内に思ひつ、け侍りし」とある。  
半分に省略したという所であろう。

島津美作貴澄室は『浪の下草』では「貴品養母」となっていて、慈誠君  
恵能子かと考えている。『浪の下草』では題は「柳風」、卷之一、春之部に  
ある。雑歌で、和歌中の表現を詞書とした四首の最後に、「なくもなひ  
く」という詞書で配されている。

島津大炊貴柄室の286番の和歌は、玉里文庫本では夫の貴柄の作となつて  
いるが、『浪の下草』は垂城史談会本のように貴柄（貴明）室である。『浪  
の下草』では、第二句が「数もみたれて」、第五句が「影そす、しき」と  
ある。川水に光が映るのであれば、篤実が改めたように「数もかくれす」  
とある方がすつきりしているであろうか。613番の課題は、『浪の下草』に  
は「庭初雪」とある。

川畑篤実が『浪の下草』を材料としたことは間違いない。その選者  
の妻の作品を『浪の下草』から選ばなかったのは、川畑篤実が末川周山夫  
妻と近く接していて、『浪の下草』以後の作品を多く知っていたからでは  
あるまいか。筆者は、『松操和歌集』の末川周山夫妻の和歌は、『浪の下草』  
以後の作品なのではなからうか、と思うのである。

### 本稿の調査から——まとめに代えて

筆者は、拙稿『松操和歌集』の新納忠元、忠増、久品の和歌——その原  
形から所収形まで——において、『松操和歌集』が何を材料としているか、

逢みしは夢うつ、ともおもほへす今朝こそ袖はいと、かわかね

『松操和歌集』は、意外なことに「後朝恋」の和歌だけを島津久季女の作とし、外は全て兵庫守久季の室作としている。久季女がしかるべき人の室として伝わらないので、若い女性らしい「後朝恋」だけを彼女の作とし、歌人として伝えられていた久季室の和歌を増やしたのであろうか。但し、『稱名墓志備考』には、外に久季室の「五月雨晴」の和歌もある（採用されなかった）。又、「西海拾玉」という歌集と作者名が異なることに懸念は無かったのであろうか。勿論、川畑篤実が何に取材し、「西海拾玉」『稱名墓志備考』に目を通していたかどうかという問題もあるのであるが。

さて、川畑篤実は、「鶯の」の和歌(128)を「題しらす」として『松操和歌集』に入れている。和歌の第二句も「啼音を聞けは」と改められている。鶯の啼音と昔の人の面影の密着度が強められた訳である。課題が「春」から「題しらす」に改められたのは、その為であろう。「池月久明」という題の和歌(453)は、第三句を「秋の月」、第四句から五句にかけてを「かはらて澄る庭の」と改めている。『稱名墓志備考』の和歌では「すめ」が懸詞気味であるが、川畑篤実はそれを煩わしいと感じたのであろう。「夕顔」という題の和歌(276)は、第二句を「見るもす、しき」、第三句を「夕露の」、第五句の末尾を「夕顔」と改めている。『松操和歌集』の方が「夕顔」を中心にして、すっきりとなつていと言えよう。「ふかみとり」の和歌(312)は、「松下納涼」という題が「松樹新涼」に改められたので

はないかと思われる（歌題なし）。和歌の第二句が「陰さへ」に、第五句の末尾も「松の下しは」に改められている。「夕虫」という題の和歌(385)も、第一句が「なれも又」、下の句が「夕くれことに虫そなくなる」と改められている。『松操和歌集』で唯一久季女の作とされた和歌(943)は、第二句が「夢かうつ、か」に改められている。

### 垂水郷女性作者

『松操和歌集』による江戸時代女性歌人史で述べたように、『松操和歌集』では、当代へ続く垂水郷女性作者の流れが注目されている。末川周山室に始まり、伊集院兼貞妻、島津貴澄室を経て、島津貴柄室に至るのがその流れである。この三つの時代間にはそれぞれ二世代（弱か）の差がある。

さて、『松操和歌集』に収められている和歌は、それぞれ次の通りである。

#### 末川周山室

36 夕月夜いつく共なき春風におほつかなくも匂ふ梅か香

夕はなを<sup>x</sup>

95 あかす見ん色も匂ひも桜花かすみなはてそ春の夕くれ

#### 伊集院八兵衛兼貞妻

野外鹿を<sup>x</sup>

415 妻こふる野への千くさの色くに思ひ乱れて鹿やなくらん

内蔵久品の834～836番の和歌が同様の手法で纏められていることを指摘していた。

山崎財寺をすくるとて、

時をへて御法そよとのたから寺つたふるすゑよなをゆたかなれ

887 川畑篤実は、『吾妻の夢』のこの和歌を「釈教歌」に収めている。詞書は「山崎宝寺に<sup>もつて</sup>て」となっている。『吾妻の夢』では、船で通り過ぎたのだが、『松操和歌集』では宝寺に参詣したようになっていて。和歌も、第一句を「祈置し」、第二句を「世々の」、第四句を「末<sup>そ</sup>も」と改めている。「よとの」を「世々の」と改めたのは、紀行の地域性を消そうとしたものである。清見寺や石山の観音など興正院が参詣した寺が他にあるのに宝寺の和歌が選ばれたのは、釈教歌には珍らしい福々しさによるのではなからうか。

川畑篤実が直接『吾妻の夢』に取材したことは間違いないだろう。

### 『稱名墓志』所載女性作者

文化十一（一一八四）年八月に本田親孚によって編纂された『稱名墓志』に出て来る『松操和歌集』女性作者は高崎氏母妙有である。『稱名墓志』には「花」（「西海拾玉」の注記がある）「田家」「残菊」「契戀」「久戀」の五つの題の和歌が挙げられている。これらの中、『松操和歌集』が採用したのは、「田家」という題の、

もりあかす小田の庵の月にこそ秋のあはれも有明の空

一首（1169）である。川畑篤実は、詞書を「田家のこゝろを」とし、和歌の第二句も「小田のかりほの」と改めている。

### 『稱名墓志備考』所載女性作者

文政元（一一八八）年七月に、伊地知季安によって補われた『稱名墓志備考』には、島津兵庫頭久季の室、慈眼公院と久季の女とが出て来る。次に、『稱名墓志備考』の関係する和歌を示す。

最初に、兵庫守久季の室作のうち『松操和歌集』所収歌を挙げる。

春（西海拾玉）

鶯のなく音聞てもおもひ出る春やむかしの人の面影

池月久明

いくかへり影うつすらん秋ことにかはらて月のすめる池水

次は、久季の女作となっているものである（同様に）。

夕顔（西海拾玉）

立よりてみるめも涼し夕顔のかれほに咲る花の白露

松下納涼

ふかみとり茂る色さへ涼しきをかしの音聞松の下蔭

夕虫

なれもさそ物や悲しきうき秋の夕へとなれは鳴むしの聲

後朝恋

あはつの森、金平のつかをすきて、うちてのはまより三井寺をおかみ奉りけるにやは。女は此御寺にまうつることをゆるされずときくにも又、五しやう三せうのつみふかき身のほとおそれて、

まうつへきゆるしなればのちの世に身をかへてこそ三井の古寺

784 詞書は「女は此てらにまうつることをゆるさ<sup>h</sup>す<sup>h</sup>と<sup>h</sup>聞て<sup>h</sup>打出の浜より三井寺を拜して」となっている。『吾妻の夢』の文章を利用して、書かれた詞書である。川畑篤実<sup>x</sup>は、第一、二句を「ゆるしなき此世を悲し」と大幅に改めている。元の表現が文章（詞書になった）を無造作に使っていたので、「後の世<sup>x</sup>」と「此世<sup>x</sup>」を対照させて作ったのであろう。

立帰りけるに、爰は小倉山なりとき、て見ければ、峯の紅葉のいさ、かいろつきけるもよ所にかはり<sup>て</sup>みゆ。

785 小倉山しくる、ころのさそなあらん<sup>い</sup>またにか、る峯のもみち葉詞書は「小倉山にて」となっている。川畑篤実<sup>x</sup>は、第三句を「いかならん」に改めている。字余りを嫌ったのでもあろうか。

霜月初六日に、佐土原をた、んとよそひすれば、人々わかれをしみてしたひけれども、かねてさためし日なればのはへかたくて立いつるにも、むかしの人のあらましかはと人もいひ我も思ひければ、わきて袖そぬれける。守もむつ野といふ所までおくらせ給ひける。此殿、七ツになり給ひし時よりなれそひまいらせて、へたてなく年月をかさねけ

るに、今わかれなはまたいつかはとおもふにやるかたなくて、めくりあはん行ゑもしらす小車のおもひまわせはうきわかれなとかひつけてまいらせければ、御返し、

おちこちのわかれはよしやさもあらはあれまたあふ事かねてたのめは

いのちたにあらは又あふこともあらんとて、なくくわかれにける。

786 福井元教授の指摘のように詞書は、「とし比隔なくかたらひし女房に<sup>x</sup>旅中にてわかる、とて名残<sup>x</sup>おし<sup>x</sup>みて<sup>x</sup>」と、完全に虚構化されている。『松操和歌集』の詞書が大きく変わっているものとして、拙稿「『松操和歌集』の新納忠元、忠増、久品の和歌」で、新納忠元の

さそな春つれなき老と思ふらんことしも花の跡に残りて

の詞書、

拙斎慶長十八年<sup>十五年十一月三日八十五歳ニテ死去ト一本ニ見ユ</sup>

八十三歳身終ル

辞世に（『盛香集』）

慶長十五年の暮春

（『称名墓志』）

と、忠元の死を意識した表現であったものが、『松操和歌集』では、

花の歌数多よみ侍ける<sup>うち</sup>に

となっていることを指摘していた。『吾妻の夢』で「守」と記されている飛彈守忠高が亡くなった時の興正院の和歌二首を「哀傷歌」に収めているので、虚構することにもなったのであろうか。

尚、『松操和歌集』は、『吾妻の夢』の紀行から774〜786番の一連の「羈旅歌」を選んでいるが、これも、同稿で、新納忠元の844〜846番の和歌、新納

かそうとしたのであろう。

田二日、かなやを出てきく川のほとりにやすみて、

いにしへの人の心のそこをさへくみてしらる、きく河の水

778 詞書は「きく河にて」となっている。

佐夜の中山を越けるに、むかし父の我をくして東に下りたまひし時、

此山中にしはしやすみて、かなたこなた見せていとねんころにきこへ  
させ給ふける物を。今世にまさは、故郷にかへりてたいめんたまはり、  
こゝをとをりし時、むかしの事おもひ出けるなときこへさすへき物を  
とおもひつゝ、くれは、さらぬわかれのかなしさ猶身をせむ。

なき人のいひしこと葉の露かけて泪かすそふ佐夜の中山

779 詞書は「昔父の此山をわれをくして過させ玉ひしこと思ひいられて」  
となっている。引用部の始めにある表現を利用したのであろう。佐夜の中  
山では、東上の旅のことが引き較べて思ひ出されたようである。

はまなのはしあとたになし

ふりわたる代はいかはかり遠江はまなのはしのあとのなきまで

780 詞書は「はま名のはしにて」となっている。川畑篤実は、第一句を  
「ふりにける」、第五句を「跡も」と改めている。「跡も」と改めることに  
よって、「ふりわたる」という思いを出そうとしたのであろうか。川畑篤

実は、一首の独立性を重んじているようだ。

あのわたりや三河の八はしならむと人のいへは、

八はしのくもてもよしや一すちにおもひさためてわたる世の中

781 詞書は「八はしにて」となっている。『吾妻の夢』では、人から八橋  
の辺を教えられて詠んだという風だが、『松操和歌集』では八橋を渡った  
ように見える。

いな葉山を右のかたになしてとをとて、

すきかてに見てこそとをれいな山まつとてくへき身にしあらね  
は

782 詞書は「いな葉<sup>山</sup>にて」となっている。川畑篤実は、第二句の「とを  
れ」を「ゆかめ」に改めている。「む」を加えた分、作者の意志が強調さ  
れたことになろうか。

鳥もとを出て小野のすく、たかみや、ゑち川をすきて、爰を老その森  
といひければ

万代とかけていのれは身のはてはつるに老その森のした露

783 詞書は「老蘇<sup>の</sup>杜にて」となっている。川畑篤実は、第二句を「いの  
れと」と改めて、順接から逆説の関係に変えてしまっている。玉里文庫本  
は、この外にも、第一句が「万代を」となっている。

箇所も見られる。歌題では、Pの「山家暮嵐」から「山家夕嵐」への改訂（この箇所のみ）が採用されている。しかし、2番歌の「初春」は「立春」の課題に改められ、267番歌の「夏草深」も、366番歌の「草花露」も最後の一字を削られて二字の歌題に改められている。猶、「松操和歌集」は、歌題に「を」を付ける傾向にあるが、「を」の付き具合は安定しているとは言い難い。

## 興正院

興正院の『松操和歌集』所収歌については、早く福井迪子元教授に『松操和歌集』に所収された興正院の歌<sup>（注六）</sup>の考察があるので、『吾妻の夢』の関連する部分を抜き出して紹介することにした。尚、『松操和歌集』所収歌は、『羈旅歌』の774-786番の十三首に『釈教歌』の887番の総数十四首となっていること、福井元教授の指摘の通りである。

けふまで江戸にさふらはは、菊をくみよはひをのふることふきをそふへし。旅の空なりとくますやいく、とて人々を酒す、め、あつまにうへ置し菊を誰見はやす人もあらしとおもふ。

うへ置しまかきの菊のいろもかも秋風ならて誰かとふへき

774 川畑篤実は、右の文章から「東の旅館へ植置給ひし菊を九月九日旅のやとりに思ひいて、」という詞書を作っている。興正院が江戸にいたのは、明暦三（一六六九）年から寛文九（一六五七）年までの十二年間であった

が、その住まいを「東の旅館」と表現したものである。

千本の松原の内、右はふしの根、左はうき嶋か原、いづれも見すくしかたく、しはし乗物すへてなかめやる程に、山に雲のか、りければ、

はれくもるならひはあれとふしの根にかゝるはつらき空の浮雲

775 十日の記事である。詞書は「不二にて」となっている。

ふし川をわたりけるに水のはやき事、飛鳥の目を過ることくなり。あやうけなる船にあまた人をのせて、渡し守のさほのひまなくこきかへりけるを見るに、人の身も我が身のうへもともにうたかたのあはれおほえて、

人の世も我世もあはれ川水のさかまくうへの波のうたかた

776 詞書は「ふし河にて」となっている。川畑篤実は、第二句の「我世もあはれ」を「哀とそ思ふ」と改めている。興正院の文章では「人の身も我が身のうへもともに」ということに感慨があつたようだが、川畑篤実は、興正院自身の感情を省略するのが良いと考えたらしい。

岡邊のすくにやすみ、あへ河、大井川をわたる。水あさくてかち人のはきぬらさす

けふは唯名のみおそる、大井川あさせの浪をわたる旅人

777 詞書は「大井河にて」である。川畑篤実は、第五句の「旅人」を「歩人」に改めている。「水あさくてかち人のはきぬらさす」という表現を生



## 寄浅茅恋

1006 いつのまに人の契のあさち原心のあきの色をみすらん

御愛子におくれ給ひて

1043 折くを思ひいつるに云置しことの葉ことに露そこほる、

山家夕嵐を

P 世のうさに思ひかへては夕暮の嵐も忍ふまつの下庵

月前思往事を

1182 見し人のかきりを月に思ひいて、なれし雲井の秋そ恋しき

の九、十首である。これらの和歌は、1043番の和歌を除いて、島津文書の「法皇御點二十首和歌」によっている。この和歌詠草には後水尾法皇の合点と添削が付けられているので、それを傍線、小字で次に示したい。

初春

くもりなき御代のめく<sup>す</sup>み<sup>か</sup>に出る日も光さ<sup>や</sup>し<sup>け</sup>そふ千世のはつ春

郭公早過

待えても恨そつきぬほと、きす<sup>た</sup>、一聲をたに鳴すて、ゆく

夏草深

里の名もいまあらはれて深草の夏野、道は跡たえにけり

草花露

野邊はいま千くさの花の色くにむすひかへたる秋の夕露<sup>しら</sup>

## 庭落葉

風ならてとはれぬやとの庭の面は降しくま、につもる紅葉、

寄竹祝

くれ竹の幾よろつ代を契るらん一ふしにたに千世のこもれば

寄浅茅恋

いつの間に人のちきりの浅茅は<sup>せ</sup>らこ、ろの秋の色をみすらん

山家暮嵐<sup>タ</sup>

世のうさにおもひ<sup>く</sup>かへては夕くれのあらしもしのふ松のした庵

月前思往事

みし人のかきりを月におもひ出てなれし雲井の秋そ戀しき

陽和院の和歌詠草は二十首、その中「墨點十二首之内長二」とある。

所収歌は全て墨点の付いたものである。長点の付いた「世のうさに」の和歌は玉里文庫本に無いが、「法皇御點二十首和歌」が材料であったと考えられることから、垂城史談会本が当初の姿を止めているのであろう。

後水尾法皇の添削は、所収歌の五首に施されていたが、採用されたのは、

366番歌の「夕露」の「しら露」への改訂だけである。新納忠元、新納久品の

の添削の施されている和歌について調べたところでは、川畑篤実<sup>(註五)</sup>は、細川

幽斎、中馬源兵衛諸香、寺山太郎右衛門用央の添削を基本的に踏まえてい

た。後水尾法皇の添削がどうして無視されたのか、対応の違いの理由は分からない。一方、2番歌の「千世の」を「今朝の」へ、366番歌の「野邊はいま」を「野へははや」へと、川畑篤実が自分の考えで改めたと見られる

(一首)である。父木村静隠が延宝七(一六七九)年の生まれなので、島津久季女より一世代若いと考えた。但し、692番歌は玉里文庫本では法橋静隠の作(「女」がない)となっている。

木村静隠女の次は、四十年程の空白期があつて、妹姫君(一首)と末川周山室(二首)の時代に下る。妹姫君が第二十四代宗信公の妹、菊姫君とすれば、享保十八(一七三三)年の生まれ。末川周山室は、末川周山が元文四(一七三九)年の生まれなので、同世代と見て宜からう。

妹姫君、末川周山室から二世代程下つて、垂水郷の二人の女性作者に続く。伊集院八兵衛兼貞妻春子(三首)は明和元(一七六四)年の生まれ。

島津美作貴澄室恵能子(一首)は安永元(一七七二)年の生まれである。

この伊集院兼貞妻、島津貴澄室の次が最初に記した当代女性作者になる。島津貴澄と島津貴柄は祖父、孫の関係にあるので二世代の差ということになるか。

第三世代から当代作者までの間に四つの世代層が想定された。全部で八人、所収歌数十一首。人数も所収歌数も少い気がする。又、最古世代から木村静隠女の第五世代までは隙間なく作者が挙げられているが、これ以後には空白期が認められる。この現象が何によるのか、詳らかにし得ていない。

尚、有川彦左衛門貞庸母(一首)、島津将監久起女(一首)、諏訪兼時の妻か女(一首)の三人は時代を特定出来なかった。又、所の女の和歌については、近衛信尹公が「みつからよみて蚤乙女なりと宣ひ置し」といひ伝

ふ」といい、処理しかねている。

## 『松操和歌集』の和歌 ― その原形と所収形 ―

### 陽和院

『松操和歌集』に収められている陽和院の和歌(地域研究所叢書の通し番号を付けた)は、

同じ心を

2 くもりなき御代の恵にいつる日も光さしそふ今朝の初春

郭公 早過

231 まちえても恨そ尽ぬ時鳥一声をたになき捨てゆく

夏草を×

267 さとの名も今あらはれて深くさの夏野の道は跡絶にけり

草花を×

366 野へははや千くさの花の色くに結ひかへたる秋のしら露

庭落葉

566 風ならてとはれぬ宿の庭の面はふりしくまに積るもみち葉

寄竹祝を

702 呉竹にいく万代を契るらん一ふしにたに千世のこもれは

かけてであつたらしい。『松操和歌集』の女性作者で最も早い生まれなのは、諏訪李右衛門兼利妻（三、四首）であろうか。夫の諏訪兼利が慶長十九（一六一四）年に生まれているので、この前後ということになる。諏訪兼利は、岡本宗好に和歌を学び、光久の息綱久の歌学の相手を勤めたことである。岡本宗好は松永貞徳の高弟で、木下長嘯子にも師事している。諏訪兼利妻にも、このような新しい江戸の和歌が流れ込んでいることは間違いないであろう。尚、諏訪兼利妹が和歌を詠んでいる可能性もある。<sup>（注四）</sup>この諏訪兼利妻・（妹）と同世代と考えられるのが、比志島主膳国治妻（十首）である。彼女は、比志島監物範員女で、元和七（一六二一）年後に生まれたと見られる。

諏訪兼利妻・（妹）、比志島国治妻を『松操和歌集』女性作者の最古世代とすると、これに次ぐ世代に属する作者は六人になると見られる。この世代には、諏訪兼利女（一、二首）がまずいるが、川上久将女（一首）も、この世代と考えられる。父の川上久将は元和四（一六一八）年に誕生している、諏訪兼利と四歳しか違わない。島津光久の後の夫人、陽和院（十首）は寛永十五（一六三八）年の生まれで、正徳元（一七一）年に亡くなっている。彼女もこの世代の人と捉えたい。父は平松権中納言時量という公家である。彼女が光久の室となったことは、女性作者が現れた時代を象徴しているように見える。又、島津久甫妻（一首）は、頼娃久友の第三女、法名弾月院琴操妙指大姉と見られるが、宝永四（一七〇七）年に亡くなっている。夫島津久甫の生年から陽和院と同世代と考えたい。島津久邦室

（一首）も、夫久邦が豊州家季久一流なら、寛永十七（一六四〇）年に生まれているので、同世代と考えたい。高崎四郎兵衛母（一首）は、生年不明であるが、元禄三（一六九〇）年に亡くなっているもので、同世代として置こう。彼女の和歌は「西海拾玉」に収められていたとのことである。

第三世代としては、先ず島津久邦女（二首）がいる。島津内膳妻（一首）は同一人かも知れない。島津中務久輝女（二首）は、父島津久輝が寛永十七年の生まれで、島津久邦と同年である。興正院（十九首）は、島津光久の姪なので、この世代に入れる。島津久茂女（一首）も、興正院の姉妹は天逝しているので、同一人かも知れない。島津兵庫久季室（五首）は、島津久季が寛文元（一六六一）年の生まれなので、その前後として、この世代に入れることにする。肝付活堂妻（一首）も、肝付活堂が宝永六年に亡くなっているもので、この世代に入れて置こう。

最古世代が二、三人（十四、五首）、第二世代が六人（十五、六首）、第三世代が五、七人（三十一首）、第三世代の所収歌数は当代作者の数三十首に迫る多さである。

第三世代より更に一世代若いのが、堀四郎太夫興昌妻（一首）、島津久季女（一首）、川上式部久重女（一首）の三人である。堀興昌妻は、比志島国治妻の孫に当たり、延宝四（一六七六）年の生まれである。『松操和歌集』所収歌は、彼女の十二歳の作で、集中最年少の作品と見られる。川上久重女は、川上久将女の甥の女という関係である。

堀興昌妻・島津久季女と川上久重女の次の世代に当たるのが木村静隠女

# 『松操和歌集』による女性歌人史と陽和院、興正院、『称名墓志』所載女性作者、並びに垂水郷女性作者の『松操和歌集』所収歌

橋口 晋作

## 『松操和歌集』による江戸時代女性歌人史

『松操和歌集』の所収歌の時代幅について、編者の川畑平太左衛門篤実  
は「大方元龜・天正より此方文政までの歌」とその序文に記している。

『松操和歌集』歌人は全部で三百六十五人、その中で女性<sup>(註)</sup>は四十五人（問題はあるが、一応）である。地域研究所叢書第二輯の解説に「女性作者の中では、作者の同時代の齊宣公の子女たちが目立って多い」とあるが、操姫（四首）<sup>(註)</sup>・随姫（二首）・聡姫（六首）・閑姫（三首）の四人の姫君では、最年長の操姫が寛政七（一七九五）年の生まれで『松操和歌集』が成立した文政十一（一八二八）年三十四歳、最年少の閑姫が文化九（一八一二）年の生まれで十七歳であった。

女性作者で名前に「子」の付いたなるを子（三首）・藤た子（二首）・うた子（一首）・きさ子（同）・さた子（同）・つせ子（同）・てる子（同）・あ津子（同）八人は、先の四人の姫君付きの侍女でもあろうか。

四人の姫君と同じ世代<sup>(註)</sup>に括りたいたのが、寛政三年生まれの賢章院（一首）とその前年二年生まれの島津大炊貴柄室（二首）の二人である。二人とも文政十一年には既に故人になっている。名前に「女」の付くせつ女（三首）・

川井女（一首）は賢章院付きの侍女でもあったろうか。

右のように強引に見做してしまうと、文政十一年当時四十歳未満の高位女性作者を中心とする層が十六人、『松操和歌集』女性作者の三分の一強となる。この当代女性歌人とも呼ぶべき作者十六人が、『松操和歌集』の最も新しい層になる。又、このように当代女性歌人の殆どが二十六代齊宣の姫君、嫁君とその侍女となっていることは、川畑篤実の齊宣家庭との関わりの深さを物語るものであろう。

さて、『松操和歌集』によって女性和歌作者史を辿ってみると、どのようになるだろうか。

叢書解説には作者達は大まかに、

- 一、大中公（最晩年）や義久・義弘公を中心とする戦国時代
- 二、光久公の息男たちを中心とする寛文・元禄・享保の交
- 三、齊宣公や編者の同時代人の活躍する寛延・文政の時代の三つのグループに分けられると記されていた。しかし、女性作者には、「二」の戦国時代に入る作者は一人もない。

女性作者の登場は、島津第十九代家久の晩年から第二十代光久の時代に